

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401、044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 88 号

“検証” 江戸時代までの日本人の歩き方(2)

====手足、同方向の歩・走行に見られる日本文化====

前回は、江戸時代以前の日本人の歩・走行の方法が「手足同方向の歩・走行」で動いているのではないかという疑問から、それを裏づけるため調べたところ、平安時代から江戸時代の絵画や版画の中から多くを発見する事ができました。

今回は、今日の私たちの生活や習慣の中で「手足同方向の歩・走行」あるいはそれに近い痕跡がないか考えてみたいと思います。さらにもう一つは、いつ頃から、どのような理由で現代のような「手足逆方向の歩・走行」になったのかも考えてみたいと思います。

はじめに、前号では紹介できませんでした江戸時代後期の十辺舎一九が著した滑稽本「東海道中膝栗毛八編上」の堂島米市之図(写真 1)を見てみますと当時の米穀市場の様子が描かれています。中に人の走る姿が見られます。その多くが手足同方向であることがよくわかります。もしもこの現場を現代人が今風に再現すると全く異なる光景が現れるはずで



写真 1「堂島米市之図」

それでは、手足同方向、あるいはそれに近い動作が現代人の生活の中に残存しているものはあるのでしょうか。日本の伝統的武道で神事である相撲の稽古をご存じの方は、すぐに気が付くと思いますが、「摺り足(すりあし)」「鉄砲」などは間違いなく手足同方向で動いています。柔道の「右自然体」「左自然体」も同じです。「右自然体」とは相手に向かって、右足を前に出し、右手で相手の左襟をつかむ方法です。相撲にしても柔道にしても、この動きが動作の基本になるわけです。これらに関しては空手や合気道等も同様の基本動作があるようです。

日本の武家流古式礼法の「小笠原流礼法」では、腰から上の動きが少なく、肩・腕の動きは無く、摺り足で膝は伸ばさず、少し曲げたまま歩行し、歩幅は狭く、急ぐほど歩幅はさらに狭くなります。丁度「能」の動きを思い浮かべていただければよくわかると思います。この場合は、「手足同方向」というより上半身の動きが非常に少なく、まさに「静」の動きであるわけです。したがって肩・腕の動きがなく腰から下の動きだけの歩行となる訳ですので手足同方向の歩行とは若干異なってくるのかもしれませんが近い動作だと思えます。

もっと身近なもので盆踊りなどの仕草は手足同一に近い動きが大変多いように思えます。「金沢土席遊楽図屏風」(写真 2)は江戸時代、元和期(1615~1624)当時の庶民の踊りの光景です。動きは現代とあまり変わらない手足同方向ではありませんか(一部、別の動きの人物も見られますが)。このように、日本文化として古くから存在する武道・礼法・踊り・能などには手足同方向という点で共通の動作が大変多く見られます。



写真 2「金沢土席遊楽図屏風」

ならば、このような日本独特の動きや所作が近年まで長い間に渡って行われ、近年変化したとしたら、いつ頃変化し、それはどのような理由によるものだったのでしょうか。

日本人の生活様式が大きく変化したのは、日本の近代化が始まってからだと思えます。

その最も大きな動きは明治維新であったよう

です。明治維新は幕末期からの欧米諸国からの外圧がきっかけでした。欧米諸国の圧力に対抗するためにはそれなりの力を付けることでした。したがって維新後の日本のスローガンである「富国強兵」を実現させるためにはまずは軍事力の確立でした。徴兵制を行い、西洋式の装備だけでなく、戦法から歩行訓練まで西欧という手本の模倣から始まったものと考えられます。特に歩・走行は基本中の基本で、よりスピードがあり、力強いものでなければなりません。となると和式の「手足同方向の歩・走行」より、腕の反動をつけ、逆側の足を前に出す欧米式の「手足交互の歩・走行」がよりアクティブに行動できると考えたのではないのでしょうか。明治初期の日本の軍事教練がこのような視点で歩・走行訓練が行われたという資料は私自身は把握してはおりませんが、背後にはこのような考えがあったものと考えられます。いずれにしても、武道や舞い、能など今日まで伝統として残されてきたものの多くは、古い時代から無意識のうちに体得してきた「動きの形」が今日までしっかりと継承されてきたのだと考えると大変感動的な事のように思えます。

(文:板倉)

一新くホームページが開通いたしました。ご利用のホームページのアドレスも浅つて、ますますの更新をさせていただきます。

シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第 58 話

麻生の寺院(8) 常安寺

小島 一也 (遺稿)

上麻生の常安寺は、室町時代後期創建された、前稿片平善正寺に似て村の領主を開基とした日蓮宗の寺で、新編武蔵風土記稿には「日蓮宗、相州鎌倉郡比企谷妙本寺末、妙香山と号す、開山日鏡永正十三年七月卒須、開基光照院常安、俗名は小嶋佐渡守と云、永正十一年九月二十一日卒す、(中略)本尊三宝を安す、(中略)常安の室慧性院妙香日芳は、永正十六年十一月十三日卒す、彼が先祖の位牌は相州矢口清龍寺にあるよし言伝えり、慶長二年番神堂領六石の御朱印地を賜れり、境内に古碑一基あり、文明十六年(1484)妙祐禅尼と付されて・・・」と記しています。



昭和 46 年に再建なった本堂

この小嶋佐渡守の祖は村上天皇の末裔と言われ、八代の祖八郎豊国は武州池上で日蓮上人に謁を賜り、日眞の法名を拝し、代々日

蓮宗に帰依していた家系(小島家縁起)だそうで、応仁の乱(1467)の頃、足利公方の招きで麻生の地に土着。屋敷(現柿の実幼稚園)の表鬼門(東北)に月読神社を勧進、裏鬼門(南西)に常安寺を建立。戦乱に苦しむ村人の安寧を祈った、と傳承されています。

この常安寺の開基とされる小嶋佐渡守源左衛門高治は戦国の世の武将として妙法に帰依し永正 11 年(1514)9 月寂しております。常安寺の創建は翌年永正 12 年(常安寺縁起)ですから、この寺の創建は高治への追善供養だったのでしょう。

その後この寺は、造立僅か 30 年足らずで全焼しており、新編武蔵風土記稿によると「天文十三年二月再建あり」と記されておりますので、檀徒の日蓮宗帰依の信仰を、当時、北条氏康の農民救済の善政が再建を可能にしたとも思われ、北条氏の世が終り、江戸時代となると開基小嶋佐渡守の後裔は武士を捨て農を選びますので、寺の栄枯盛衰はあっても檀徒により 500 年余の法灯は継がれ、前記番神堂料 6 石の御朱印(注)、日蓮宗独特のひげ文字曼荼羅などが今も大切に保存されています。



小島家系図 (常安寺部分)

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「ふるさとを語る」「麻生の神社と寺院」

(※編集者注) 御朱印は現在所在不明となっているそうです。



歴史を感じさせる弘化年間 (1844~1848 年)の地神塔



小島一也氏が亡くなられたその日に彫像が完成したというカッパの平六像 (傳承『河童の詫び証文』に基づく)

シリーズ

時間と時計の話 第 1 部

和時計と西洋時計 (3)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆不定時法と定時法◆

「神の時間」から「商人の時間」への歩みは、こうして始まりました。そして商人の時間は、その歩みの第一歩から、機械時計の作る人工の時間でした。中世後期にかけて、西欧各地の市庁舎に、創意工夫を凝らした様々な時計が取り付けられたのですが、こうした市庁舎の時計は、「神の時間」に対する「商人の時間」のシンボルとしての役目を負っていたのです。

機械時計が誕生して、およそ半世紀が経過した 14 世紀中ごろ、まずは教会の塔に、少し遅れて市庁舎の塔にと、機械時計が据えつけられました。機械時計そのものが、当時の最先端の技術の粋を集めた貴重品だったのですが、ハイテク技術の粋を駆使して機械時計を製作した親方たちは、それだけでは満足しませんでした。高位の聖職者や市庁舎の幹部たちが、感歎の声を上げれば上げるほど、さらに高度な技術を披露して、より以上の賛辞を得たいと考えたのです。賛辞こそが彼らにとっての勲章だったのです。

◆からくり時計の誕生◆

こうして、機械時計の進化の行き着いた姿として生まれたのが、カラクリ時計でした。日本では有楽町のマリオンのカラクリ時計が、一時多くの人々を集めていましたが、マリオンのからくり時計の中世版が存在していたのです。まず、スイスのベルン市に、ツァイトクロッケン (= 時鐘) と呼ばれる時計塔に取り付けられた、大きな天文時計があるのですが、この時計に小熊とピエロそして時の神が登場する、大がかりなからくりが仕掛けられています。ヴェネツィアのサン・マルコ広場の入り口に当たる門の上の天文時計も、からくり時計として現在も活躍しています。サン・マルコ広場を訪れた人々は、サン・マルコ聖堂と高く聳える鐘塔に目を奪われ、15 世紀末に門の上部に取り付けられたからくり時計は、つい見過ごしてしまうようです。もし今後、ヴェネツィアを訪れる機会がありましたら、是非この時計をご覧になってください。このからくりも実に見事です。

西欧の時計塔は、14 世紀末から 15 世紀にかけて、建てられるようになったのですが、それは当時の都市にとって、時間とお金のかかる大公共事業そのものでした。その上機械時計を据え付けるには、複雑で高度な技術を持つ、腕の良い時計職親方の協力が不可欠でした。当時は、時計塔を見ると、該当する都市の文化水準、そしてハイテク技術の水準の見当がついたと言われる程だったのです。それゆえ各都市は、時間とお金をかけても、都市の面子にかけて、立派な時計塔を建てようとしたのです。

チェコの首都プラハは、1333 年に市庁舎が完成し、1355 年には建物に塔屋が加わりました。「黄金のプラハ」のシンボルが誕生したのです。この塔に、本格的な機械時計が取り付けられたのは、1402 年のことでした。この時計塔に、15 世紀末になって、もう一つより精巧なからくり時計が取り付けられました。取り付けられた位置は、塔の下部でした。市民や旅人が、じっくりからくりを楽しめるようにと、人々の目線で見やすい位置に取り付けられたのです。時計の文字盤の上の部分に二つの小窓が付いているのですが、正時になって鐘が鳴ると、そのたびに左の小窓から、イエス・キリストの 12 使徒が 1 人ずつ登場して、右の小窓に 1 人また 1 人と消えてゆくのです。見物衆は大いに喜び、プラハの時計塔は、大人気となりました。この時計は、その後壊されてしまったのですが、18 世紀末になって復元され、再び市民や旅人を楽しませてくれるようになり、現在に至っています。

◆日本人と時の観念◆

西洋の話から始めましたが、日本ではどうだったのでしょうか？ 日本でも時の鐘はあちこちで鳴っていました。忠臣蔵の討ち入りのシーンでも、鐘の音の告げる時を合図に行動を起こしています。落語の「時蕎麦」にも、鳴り響く寺の鐘に、「今なんどきでい」と問うシーンが登場します。幕末の話になりますが、浦賀にやってきた米国太平洋艦隊のペリー提督は、停泊中の船内で、夜半に何度も鐘の音を聴き、鐘の音が日中にも響いてくる事を知り、それが時報であることを理解して驚き、かつ感動した事を自身の日誌に書きとめています。「文明の遅れている国だと思っていた日本は、こと時間の観念については、アメリカ人よりも進んでいるように思われる」と。

松尾芭蕉の『奥の細道』は、元禄 2 (1689) 年 3 月から約半年をかけての旅だったのですが、この旅で芭蕉の同伴をしたのが、弟子の 1 人曾良でした。芭蕉自身は、全くとって良いほど、時間に拘らないタイプだったのですが、曾良は時間入りの旅日記を残しているのです。

(続)



サン・マルコ広場の時計塔



ベルンの時計塔

平成 27 年度 柿生郷土史料館友の会 法人会員紹介 57 法人(順不同・敬称略)

本年度の柿生郷土史料館「友の会」の法人会員の皆様をご紹介します。
当館の活動を支えていただき、深く感謝いたします。(平成 27 年 8 月 1 日現在)

- ★月読神社★琴平神社★王禅寺★常安寺★麻生総合病院★たま日吉台病院
- ★アルナ園★虹の里養護施設★柿の実学園★柿生保育園★青葉幼稚園★和光学園★桐光学園
- ★川崎信用金庫柿生支店★J A セレサ川崎柿生支店★神奈川トヨタ自動車麻生店★ささらプロダクション
- ★フラワーショップまきば★三共エースト★柿生恒産★青戸建材店★カジノヤ★孝友商事★北島工務店
- ★観財★栄運輸★スズユウ商事★荒川電気工事★朝日ホーム★奈良工業★麻生自動車★志田電子製作所
- ★リック設計企画★広東商事プライマリー★白百合商事★サイトー農芸★誠和産業★菊川園★アクティブ
- ★杉本電気管理事務所★長瀬敏之土地家屋調査士事務所★ステップ★栄和★エムケープリント
- ★ティーエムコーポレーション★ホシノ商会
- ★フィッシュ・オン王禅寺★とん鈴★レストランベル★カラオケゆう★小料理わかば
- ★美容院ルシル★ヘアサロンミウラ★禅寺丸本舗★まつや★東急スポーツオアシス

柿生郷土史料館 9・10 月催物ご案内 (入場無料)

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月 4 回)
9 月 6・13・20・27 日 (毎日曜日) **10 月** 3・10・17・24 日 (毎土曜日)
 ◎開館時間：午前 10 時～午後 3 時 (10 月 31 日は休館です)

第 9 回 実物の歴史
三二歴史資料展



王禅寺村「志村家文書」展示公開 (1)
◆◆天保の飢饉に関する文書をみる◆◆

期日：4 月 18 日～9 月 20 日
内容：王禅寺村「志村家文書」をもとに江戸時代後期の社会の姿と王禅寺村の様子について考えてみます。

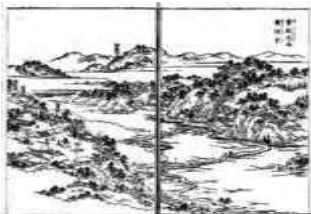
第 56 回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ (7)
入門 鶴見川流域史 (中世編その 2)

●鶴見川流域史を古代・中世・近世で考える その第 4 弾！ 中世編しめくり！
講師 中西望介氏 (戦国史研究会会員)
日時 平成 27 年 9 月 20 日 (日) 午後 1 時 30 分～
内容 中世後期における鶴見川流域諸勢力は戦国動乱の時代をどのように乗り切ったのか

第 9 回 特別企画展

「江戸名所図会」に見る江戸と川崎



江戸名所図会は江戸の町の地名由来や、名所案内ですが、近郊の川崎、横浜なども含まれています。
今回は川崎、なかでも柿生地区に関連する名所の紹介を中心に、当時の川崎、大山街道沿いの地域がどのように描かれていたかを展示します。
会場：柿生郷土史料館特別展示室
期間：9 月 27 日(日)～12 月 19 日(土)

第 57 回 カルチャーセミナー

明治期以降における
柿生周辺地域の養蚕について

柿生の里は、禅寺丸柿や黒川炭の生産で知られますが、幕末～昭和前期においては、養蚕・生糸の生産も盛んで、都筑周辺地域の中では、最も生産高が高かった歴史を持ちます。
現在はその実態がほとんど忘れ去られようとしています。もはや数少ない実体験の様子を豊富な実物資料とともにお話しいたします。

講師：中溝正治氏
日時：10 月 17 日 (土) 午後 1 時半～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室